



同志社人物誌 (58)

大 下 角 一

村 山 盛 敦

○はじめに

「村山君がドイツに留学します。どうかよき学びの時を持ち、帰国して日本の伝道のために全力を尽すことが出来ますように。アーメン」

一九六二年三月末、妻と五歳の息子と三人で、向日町の大下先生宅を訪れた。重態であることも知らず、又、あや夫人も疲れて休んでおられることは知らず、四月早々日本を離れるための挨拶にと門のベルを押した。やや間を置いて夫人が現れ、再び奥で何やら話しておられたが、どうぞと促されて客間に入

った。二人共休んでおられたことを知った私達は、無礼を詫び早々に引き揚げますと申しあげたが、引き止められてしまった。あや夫人が手製の昼食を用意したからと更に引伸ばされ、食前の感謝を兼ねて祈って下さった言葉が、冒頭の祈りである。

心の底から絞り出すような声であったが、熱い、暖い、愛情に溢れるものであった。

四月二十一日午後四時三十五分、大下先生が六二歳で召天されたことを、妻の便りで知った。南ドイツの美しい町ブラウボイレン、瀟洒なゲーティンステイチュートの横を流れ

る小川のそばで、手紙を握り締めて、「あやおやじ」と何度涙を流したことがある。あや夫人によると、自宅で大下先生にお目にかかれたのは私達が最後であったということである。

あれから二四年の歳月が流れた。

今年の七月、二週間の予定で、ハワイホールのハリス合同メソジスト教会日本語礼拝を応援した。この牧師、ロバート・W・ラーン先生の要請によるものであった。先生は豊申教会で八年間共に働き、同志社神学部嘱託講師もされていた方である。

旅に出る直前、同志社時報の編集委員から電話があり、大下先生の人物誌を書いてくれとの依頼があった。丁度ヌアヌ組合教会の水沼牧師のところで大下先生の番町教会時代の説教原稿を届けることにしたので、簡単に引受けた。何とかなると思ったからである。

清水牧師から昨年、次のような便りが届いていた。

「私たちの教会は、この二月に教会創立百年の記念を迎えました。……従ってその後も同志社との関係は深く、奥村多喜衛、大久保

真次郎、堀貞一、山口金作牧師と続いて来任され、戦後もまたしばらくして原忠雄牧師が当教会およびマキキ聖城教会で働かれました。一方この教会からも、大下角一、後藤政一、山村好美牧師が同志社で働くために、日本に行かれました。

こうした交流の中で、ハワイ島コナ出身の大下角一先生はハワイ大学の学生時代に当教会で活躍し、ここから献身してシカゴ大学神学部にて卒業後、英語教師として若い数年を同志社にて過ごされました。さらに、戦後、同志社神学部長、同志社大学長となられた時には、ハワイの教友たちと呼びかけ、多額のハワイ奨学金をもって学生たちを励まし、支えられたのであります。

一世信者の中には青年時代の大下先生を知る者があり、戦後の何年か奨学金を集めて送りましたヨ、と思ひ出を語る人がいます。今もこうして、こうべをめぐらし、目を閉じるだけで、「おやじ」こと大下先生のせかせかした歩き振りが、低音のかすれ声が、そして「空の鳥にはやぐらあり」と張り切って説教しておられた御様子などが、眼前にいきいきとあらわれる思いがします。

さて、この度、当教会で教会創立百年記念として「新教育会館」を建築する事になりましたが、その中の一室を「大下角一博士記念室」The Late Reverend Dr. Kakuchi Osamu's Memorial Room といいたしく願っています。……」

ハワイに行つて、清水昭牧師からは色々情報をもらい、中野次郎著、ホノム義塾——會我部四郎伝も紹介された。又、ハワイ島ヒロのヨシシゲクニキヨさん（大下先生と同じ頃の教会員）の電話番号を教えられて連絡した。話して見ると「私は今八二歳で、大下先生は五つ六つ若かったから詳しいことは知りません」と言われた。計算してみると、大下先生は今年で八六歳になるはずである。

ウエスレ合同メソジスト教会の塚本彰夫牧師からは、ハワイ日系キリスト教連盟編のザ・パラダイス（一九七五年に開かれた、日米クリスチャン大会記録と、ハワイ州日系キリスト教会記録）を受取った。
Honolulu Advertiser に「Today's Thursday」を布哇報知には「一日一想」を書いておられるヌアヌ組合教会名誉牧師、大角ポール先生は、電話帳にある大下姓に片っぱしから

電話をかけて下さった。しかし大下角一先生の情報は集まらなかった。

八月七日に帰国したら、竹中正夫教授から同志社とハワイ——戦前の交流の軌跡をたずねて——（同志社アメリカ研究第二十二号）が届いていた。

人物誌を引受けたことを後悔したが、今更どうにもならない。手もとにある資料をもとに、とにかく「大下角一人物誌」を書いてみることにした。

○キリスト教との出会い

大下角一先生は一八九九年（明治三二年）九月二〇日、ハワイ島コナで藤本家の末子として誕生した。其の後母親が大下家に幼い角一をつれて再婚した。色々苦労があったようだが、自分の力でヒロ高校を卒業した。

ヒロ組合教会（現在のホーリ・クロス教会）に出席していた先生は、樋口貫牧師（同志社神学校別科明治二九年卒）から受洗した。

この教会は一八九一年一月に創立されたハワイにおける最初の日系組合教会である。

大下先生が受洗した当時のことを樋口牧師は次のように回顧している。

「余がヒロ教会就任後、余より洗礼を領せし四五二名中の二一九人目に受洗せしは大下角一君であった。ときは大正七年（一九一八年）六月二日であった。君が基督者として産声をあげるや、その中心は光明に輝やき、アンピションに満ちた如く見えた。その後数ヶ月にして君は余に來りて曰く、「先生、私は伝道者となります」と。時に君は齡一九歳の青年であった」

ここにある数ヶ月に何があつたか？ 私が伝道師の頃発行された『南大阪教会三〇年史（昭和三年二月五日発行）の記事と関連があるのではなからうか。



1927（昭和2）年頃

「大下角一先生は、将来弁護士となつて働こうと志し、ハワイ大学に学んでいた。或る夏、YMCA主催によるハワイ全島の青年代表者のキャンプに参加し、シャウッド・エディー博士の話を聞いて、先生の若い血潮は非常な感激に燃やされた。博士が『誰がボールを受けとめるか？』とアピールした時、先生の魂は、『私が受けとめます』と囁いた。これが献身の決心をされた瞬間であつた」

大下先生はハワイ大学時代、ヌアヌ組合教会に出席し、堀貞一牧師から、強い影響を受けた。

其の後北米大陸に渡り、ミズリー州立大学に転入学し、社会学を学び、一九四二年（二五歳）に卒業してB Aの称号を得た。さらにシカゴ大学院神学研究科に入学、一九二六年（二七歳）同研究科を修了してM Aの学位を得、翌一九二七年（二八歳）シカゴ神学校を卒業してB Dの学位を受けた。

○ スチューデントプロフェッサーへシカゴ神学校卒業の時、成績優秀のゆえに特別のフェローシップを受け、

欧米の大学に行つて研究する機会を与えられた。

しかしかねてからの念願であつた日本伝道の志を決意し、同志社総長、海老名弾正の招聘もあり、同志社高等商業学校にスチューデント・プロフェッサーとして来日した。一九二七年（二八歳）から一九二九年までの二年間であつた。

この時、賀川豊彦先生との出会いによって、強烈な信仰体験を得た。更に特記すべきことは、一九二八年、総長海老名弾正次女、あや姉と結婚したことであらう。

あや夫人は自ら次のように記している。

「レイモンド・大下は、のちに私の夫となつたのですが、そうした制度で（スチューデントプロフェッサー）派遣された最初の人になるわけです。

彼が京都に着いた晩は、珍しく月の美しい晩でした。同じ寮にいた小川牧師（のち賀川豊彦先生の秘書となる。当時総長秘書）をうながして散歩に行くつもりだったのでしようが、小川先生は仕事があるからと言つてなかなか応じません。レイモンドはすっかり怒つて、日本人の悪口をさきざき並べ立てたそ



1938 (昭和13) 年 デントンハウスにて

です。美を愛する国民だと聞いて来たが月を見ることも知らない。要するに日本人の美とは形式と模倣にすぎぬ、と彼独特の論法で小川先生をやり込めて、自分もくさってしまっただのか、寢床に入ってしまった。その時たまたま父が散歩に出て、あまり月が美しいから、日本に来たばかりの二世を誘ってあげようというわけで、寮に立ち寄りしました。総長に誘われて、レイモンドはびっくり飛び起きて出て来ると、今度はそこへ、弟の雄二と私を通りかかりました。……」

何と美しい思い出であろうか。

一九三〇年、単身シカゴ大学に帰り、ドクターコースを修了、一九三一年ドクター・オブ・フィロソフィーの学位を受けた。

一九三一年、東京番町教会副牧師として、網島佳吉牧師をたすけて働いた。

一九三五年、南大阪教会牧師に招聘され、生涯、牧会者として全力投球した。

○大下角一と同志社

二世として、第二次世界大戦中労苦された大下先生は、一九四八年六月、同志社大学神学部教授会によって、実践神学担当教授に招聘され、来任後間もなく神学部長に選出された。

住居が京都になかったため、此春寮に（神学部寮、単身乗り込んできた。学生間に「南大阪教会のオオシタとかいう二世牧師が、此頃の神学生はなっていないので、並べてなぐる」と言っているそうだ」という噂が、まことしやかに流れた。酒井哲夫、高道基、私なども寮に仮寓することに猛反対した。しかし其の後、直接大下先生に出会った私たちは、噂に惑わされた自らを深く恥じ、先生を「お

やじ」と名付けて尊敬した。

御家族がデントンハウスに移られた後も、寮の風呂にわざわざ入りに来て、学生達と遅くまで話し込んで行かれた。冬など、一緒に歩いて来た幼い息子たちが、湯ぎめして震えていたことも、一度や二度ではなかった。

一九四九年、宗教部長を兼任、折から起きた福井地震に、救援責任者として学生を指導し、バックアップした。

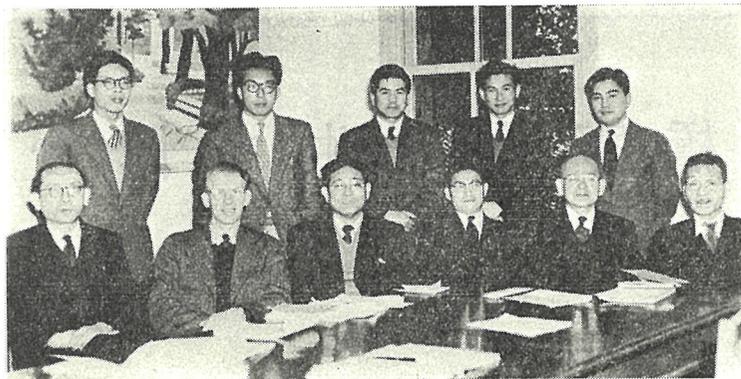
飯 清、竹中正夫、酒井哲雄、武間亨次、河崎洋子、高道基、清水昭、中嶋正昭、村山盛敦などが大いに活躍し、同志社大学のキリスト教運動推進の基盤を築いた。

一九四九年秋、母校シカゴ神学校より、ドクター・オブ・ディヴィニティーの名譽学位を受けた。

一九五四年七月、大学長に選出され、一九六〇年までの二期、大学の充実のために貢献した。

此の間、寧靜館と弘風館を新築し、新町校舎の土地購入等の外形的発展をなすと共に、教授の海外留学制度の拡張と実施、各学部の教授陣容の充実等に寄与した。

私は一九五三年から一九五九年まで、大下



1954（昭和29）年頃

角一牧師のもと、南大阪教会の副牧師として働いていた。丁度、大学長として重責を荷っ

ていた時期である。

大学長として、又、京都市公安委員として其の他十指を越す公職を持って、多忙を極めていた。

しかし先生は、最後の最後まで、牧師であることに誇りを持ち、火の出るような説教で聴衆を魅了していた。

こんなことも思い出す。

役員会で、伝道師招聘を議することになり、役員がそれぞれ意見を述べた。

「説教のうまい人、人格円満な人、青年を指導出来る人等々……」だまって聞いておられた先生は、「もしこの教会に愛が生きているならば、どんな人でも受け入れましょう。どんな人でも育てましょう」と発言され、一座はシーンとなった。

一人のハワイ二世が、日本伝道のために献身して同志社に來たとばかり思っていた。しかし、ヒロの樋口貫牧師、ヌアヌの堀眞一牧師、総長海老名弾正、賀川豊彦たちとの出会いの中に、神の見えざる御手があざやかに働いていたことを深く思う。

冒頭の大下角一先生の祈りは、ただ、私だけのための祈りではなかった。



大下角一先生御夫妻

先生がスチューデント・プロフェッサーとして接した学生達、番町教会で出会った青年達、同志社や南大阪教会で交わった若者達、特に伝道者として巣立って行った神学生たちへの祈りであったことを今思う。

そして、その祈りは今も生きており、全国各地で活躍している伝道者たちのほげましとなっている。

あの時五歳だった息子、先生から南大阪教会で幼児洗礼を受けた息子は、同志社大学神学部、シンガポールの三一神学院を出て、いよいよこの秋伝道界に巣立とうとしている。

（昭和二十六年大学神学部卒業・二十八年大学院神学研究科修了 日本キリスト教団豊中教会牧師）